

史遊会通信

NO. 196
平成23年
3月13日
発行

事務局
03--3712
0651
下山田方

二月講演

信長の女性観について

島津隆子

生母と乳母

信長は天文三年九月二七日、愛知郡那古野城中で織田信秀の三男として生まれた。

母は江州六角の土田氏の女である。この母に「愚かな子は母の愛が募るばかり。私の自慢できる子ではない」と言わせるほど好かれなかったようだ。事実、誕生間もなくから次々と乳母の乳首を噛み切るほど、癩癧症で厄介な赤子だった。

信長が生まれた翌年、父親は那古野城を信長に譲ると、土田御前と次男信行を連れ、新築の古渡城に移ってしまう。

乳母が交替する中、信長が素直に乳を飲み言うことを聞く一人の乳母がいた。池田

恒利の妻である養徳院というこの女性は、長男を産んだ直後、三歳児信長の乳母兼養育係になった。

腕白少年信長の奇行や粗暴さ、傍若無人な振舞は周囲の人々を驚かせたが、養徳院は物を作ったり壊したりの遊びが、少年の愉快だと理解し、温かく見守った。

また少年から青年になる頃の信長の髪は打ち紐の茶筌巻。平袖に半袴。火打ち袋の大巾着を腰に下げ、瓜の皮や柿の種を吐き散らしながらの往来闊歩。荒馬に乗って山野を駆け回るなど、奇抜そのものだった。

このような行動は二歳で別れた両親の関心を引くための強い反抗と、やり場のない

例会のお知らせ

◎ 3月例会

日時 平成23年3月23日(水)
午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階
社会教育館 第2研修室

講演 太田精一氏

テーマ 幕臣たちの明治維新

自由執筆 鯨 游海・柴田弘武・

中込勝則の諸氏

締切 3月末日

◎ 4月例会

日時 平成23年4月27日(水)
午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階
社会教育館 第2研修室

講演 高橋由貴彦氏

テーマ 支倉常長の教皇パウロ五

世との謁見とローマ市民

の驚嘆

自由執筆 新井 宏・太田精一・

山本鎮雄の諸氏

締切 4月末日

締切

怒りの爆発だった。しかし後々、創造と破壊へと繋がる信長の素地ともいえよう。

信長が十六歳の時、父信秀は四十二歳の若さで古渡城にて病没。

やがて土田御前の膝元で育った弟信行が兄に反旗を翻す時がくる。その直接の原因は父親の盛大な葬儀の場面で起きた。信長は例の奇妙な衣服をまとい、霊前に進むと抹香を掴み、「これでも喰らって、成仏せよ！」と位牌に投げつけた。この破天荒な振舞に列席者は呆れ果てたが、一方、信行は折り目正しい姿で、品性の確かさを印象づけた。

それから二年後、織田家の前途を案じる余り、信長の傳役兼重臣の平手政秀が諫死する。

「乱世に墮落した日を送る織田の当主信長は葬るべき子」として、親信行派を結集した土田御前の影がちらつく。

そして始まった兄弟の戦いは七千もの兵が呼応した信行軍が、七百の兵しか集まらなかった信長軍に敗北するのだ。

僧の姿に身を変えた信行に土田御前が付き添い、信長に詫びを入れて一旦は許された。だが、一年後、再び背いた弟は清洲城

で殺されてしまう。

信行を亡くした土田御前は信長が本能寺に斃れると、蒲生氏を頼って安土城から日野城に逃れた。さらには信長の異母弟の信包に保護されるが、信包は天下人秀吉の怒りに触れ、最後は毒殺された。不遇の上田御前は七十四歳で死を迎える。

乳母と生母が辿った明暗が信長の女性観に決定的な影響を与えた。母親との命がけの愛憎劇を通して、人生を早く知った早熟な信長の恋愛と結婚。濃姫と吉乃との関係に光と影の対比が顕著に見えてくる。

濃姫との政略結婚

信長は十五歳で一歳年下の濃姫を娶った。濃姫の父斎藤道三は少年の頃京の寺に預けられるが、還俗して山城国の油問屋の婿になり、諸国を行商。その後あこぎな手段で美濃国の守護代斎藤氏の家督を相続。美濃国を支配するまでになった。

その頃まだ弱体だった織田信秀は、美濃の手強い道三と手を結ぶ必要があった。そこで息子信長と道三の娘濃姫との政略結婚が成立する。

濃姫が嫁ぐ日、道三は短剣を手渡し言う。「信長が本物の大馬鹿なら、この短剣で殺

すがよい」濃姫は答えた。「案外この剣で殺られるのは、父上の方かもしれませぬ」花嫁は密偵兼謀報員でもある。その証拠に、「近頃頻繁に外泊なさる理由をお聞かせ下さい」という濃姫の問いに、「お前だから言うが、道三殿に背いて、わしと誼を通じる斎藤家の有力な家臣がおる。絶えずある所に連絡にくる。わしは義父と義絶したくないゆえ、説得している最中なのだ」と信長は答えたのだ。

濃姫からの密書を受取った道三は、信長の偽情報とは気付かず、有力家臣らを処刑。これによって斎藤家の勢力は大きく削がれる。やはり信長の方が役者が数倍上だった。

吉乃との愛

濃姫が嫁いできてから七、八年経ってからか。信長は生駒氏の吉乃を見初める。吉乃は尾張郡村で灰と油商を営む富裕な生駒宗家の女だが、土田弥平次の妻でもある。

この広大な構えの生駒屋敷には近在や遠国から武者や兵法家、蜂須賀小六たち夜盗まがいの浪人や、若い秀吉まで出入りして、近隣諸国の情報が集められていた。

そして弘安二年四月、突如として起った斎藤家の内紛で、道三が息子義竜に敗死。

その五ヶ月後、吉乃の夫がやはり義竜に討取られる。その年、二十九歳の吉乃は六歳年下の信長の子を身籠るのだ。

信長と吉乃との愛を妨げるものは何もない。信長の凍りついた人間的な愛情は燃え上がり、長男誕生から一年毎に次男、長女が生まれる。長女徳姫誕生の永禄二年までに、反抗する織田一族ごとくを征伐して、尾張を平定。吉乃の存在が信長の尾張統一に拍車をかけたといえよう。信長の愛と闘争はまさに表裏一体である。

桶狭間の決戦から三年後、信長は小牧山に新しく居城の造営を始めた。その意図の一つには、城内に吉乃のための御殿を造ることがあった。

だが、春、御台様御殿に移る時、吉乃は病んでいた。やっと新しい城に入った吉乃の小康は束の間で、永禄九年九月永眠した。享年三十九歳。信長三十三歳の秋のことだ。信長にとって濃姫の存在は必要悪というか、政略結婚の茶番劇であった。しかし、道三の死によってこの劇の幕は引かれ、濃姫は歴史の舞台から姿を消した。

お鍋を側室に

信長は上洛の帰途、敵対中だった義竜暗

殺団が身に迫っていることを知る。この時近江の八風峠越えの道案内をしたのが小倉実澄であった。九年後、その意趣返して実澄は六角承禎から攻め滅ぼされる。

夫を喪った実澄の妻お鍋は二人の幼子の手を引き、信長を頼って岐阜城を訪れた。恩人の妻が敗残の未亡人になった姿を目にした信長の胸に激しい情愛の念が沸き起こった。同時に復讐の憤怒にかられた信長は承禎を自滅へ追いやった。お鍋の二人の子には領地を回復してやり、お鍋を側室の座に就けた。まるで吉乃の再来のように二男一女を産ませ、壮麗な安土城を築くと、新御殿を建ててお鍋を住まわせるのだ。

生母の愛に飢えた欲求不満から、信長は母性の匂う妻を求めた。吉乃の持つ温かい母性といじらしさに魅せられ、その二年後「子供を助けて欲しい」と縋ったお鍋に健全な母性の匂いを嗅いだ。美しい面差しに吉乃の面影を重ね、はっきりとした物言いにも惹かれた。

戦略の手駒に遣われた子女たち

信長は子女の婚姻を政略の道具に利用した。そこには常に残酷さがつきまとう。

吉乃の生んだ徳姫は徳川家康の長男信康

に嫁ぐ。織田徳川の同盟強化のための婚姻である。しかし徳姫の、父信長に宛てた十二ヶ条の書状によって、信康と母築山殿は共に処刑される。

近江の浅井長政に嫁いだ妹お市の方が、夫長政の寝返りによって陥った兄信長の危機を救った逸話は有名だ。婚家か実家かの二者択一を迫られたお市は、やはり実家の密偵役に徹して、悲劇の道を進む。

叔母であるお直の方も甥信長の命によって、夫亡き後、女城主になるのだ。しかし、武田方の智将と謳われる秋山信友に攻められ、示された結婚の条件を呑んだ。だが、甥信長の罵声を浴びながら、信友と共に逆襲にされ無惨な死を遂げる。

信長の寛容と残忍さ。中間のない両極端に育った人間の性格は、乳母と実母の情愛と憎しみ。濃姫と吉乃。お鍋を通しての虚と実の対比に鮮やかだ。女たちによる情念の差が、信長像を個性的に際立たせている。

自由執筆

政治家の世襲について

隆 恵

先般北朝鮮において、二代目の最高権力者の金正日の後継者として三男の金正恩が認知された。一方、中東とアフリカ北部では民主化のうねりの中で、永年君臨してきたエジプトのムバラク大統領が息子に権力を譲渡しようとするも国民の反対にあつて辞職を決意し、リビアのカダフィー大佐も息子に継承させようとしていたが、今や風前の灯の中にある。

余談だが、共産党一党独裁の中国では、最高権力者に二代目相続は現出していないが、現在の胡主席の次期主席に習副主席が内定し、共産党幹部の二代目が初めて最高権力者の地位に就任する事が決まった。

永年の専制主義者に共通している事は、一族郎党を上げて巨万の富を国家からくすねている事である。この政治上の最高権力者の地位は、自分が永年居座るだけでなく、息子たちに継承したいと思うほどに「旨みのある」ポストだからである。

こうした国家財産の合法的収奪は、権力者一人やその息子たちと一族だけでは実現出来ない。彼らを擁立・擁護して収奪資産の分配を狙う集団が必ず存在する。即ち、取り巻きの郎党「家臣団」であり、またお裾分けを狙う利権屋「御用商人」たちである。こうした国家財産の収奪マシーンが、権力者の世襲制度の存続を願う。こうした「棟梁一族」とその「家臣団」並びに「御用商人」の存在について、真の民主主義が未熟な国だからと一般的には解釈され、我々日本人もそう思っている。確かに、独裁専制国家ではこれが顕著に現れるが、先進の民主主義国家でもこの「専制国家」同様の「搾取・収奪マシーン」が存在する国こそ他でもないわが国なのである。

日本はそんな未熟な国ではないと思うだろうが、実態は全く同じ構図なのである。彼らの専制国家の収奪マシーンは、一人の最高権力者を頂点とするのに対して、わが国の収奪マシーンは四十七都道府県のほとんどの地域が己の選挙区の政治家を頂点とする「盗人」集団なのである。エジプトのムバラクは五兆円もの収奪をしたと言われるが、日本の場合は沢山の収奪者により、

その収奪の総額は国と地方自治体に一千兆円と言う途方も無い借金を齎した。彼ら盗人たちの決まり文句は、都市部と地方の格差是正や社会インフラ整備のためと称して、何十年も継続的に公共投資を行った。しかしそのほとんどが合法的収奪のための美名であった事は既に明白化している。

この国家財産の収奪マシーンには、国会議員を中心とした世襲制度がそれを可能とし、と言うよりもそのために関係者全員で世襲制度を実現してきたのである。

わが国は、真の民主主義が導入された終戦後から僅か六五年の短期間に、首相に福田・安部・麻生という二代目や三代目の最高権力者を輩出し、俗に言う二世議員の数は自民党議員の四十%程度を占めるとも言われる。昔は政治家を一代やると全財産を失うと言われ、政治家を目指すと言うと家族から猛反対を受けた。であるにも拘らず政治家の世襲がこうも何故蔓延したのであろうか。理由は簡単である。それは、議員「棟梁一族」と地方議員・役人「家臣団」と利権屋「御用商人」と有権者「領民」の収奪マシーン組織が、これまでの甘い汁を継続させるために「後継者」を擁立するか

らである。その傾向は都市部よりも地方に顕著に現れている。

この構造は、鎌倉時代以降の地頭や大名や旗本・御家人の利権構造と本質は変わらない。江戸時代の大名たちは、財源は自分の領民（有権者）からの徴税しかないのだから、過酷な取奪を行えば百姓一揆が起きてお家取り潰しのリスクがあり、その取奪には自ずと限界があった。ところが、戦後のわが国の民主主義の名を借りた選挙制度は、自分の領民（有権者）の腹を痛めずに、と言うよりも領民（有権者）もお裾分けに預かるうとして、国と地方自治体の借金と云う財源で、野放図に取奪合戦を行ってしまったのである。換言すると、奥さんと子供たちがスカンピンの親父のクレジットカードを使って贅沢三昧をしてしまい、その決済のために親父がサラ金から借財したのが一千兆円になってしまったのである。要するに、ここ数十年のわが国の選挙制度は、志の高い「政治家」は領民（有権者）から地元への利益誘導をしないで役立たずとされ、取奪を得意とする「政治家」が地元で役立つ便利な存在として多選されてきた。

昨今のわが国は、あたかも「ゆで蛙」の

ようになり、この閉塞感の立ち枯れ状態を打開するためには、こうした選挙区全員による取奪マシーンを解体しなければならぬ。しかし、国会や地方議会の議員に自らの抑制策の実施を期待する事は絶対不可能である。何故なら、盗人に「物を盗まないで下さい、盗人の数を減らして下さい」と

自由執筆

山つれづれ

小田 絃一郎

趣味の一つに山登りがある。現在はほとんど登ることはなくなったが、平地から眺める事をも含めて現在形にしたのである。

二十年前、赴任地である静岡で、職場の山同好会主催の富士登山に参加した時のことを思い出した。

都会を思わせる混雑ぶりや北アルプスの多くの山に見られるような緑、雪渓、お花畑などの色感がないのに物足りなさを感じつつも、日本一の山の頂に初めて立ったことや足腰の衰えていないことに満足感を覚え（当時四五〜六才）、久しく忘れていた

頼むようなものだからである。

事の根源は、選挙権の不公平さ即ち選挙制度の欠陥にあるので、現在の憲法での唯一の解決策は、これまで投票権の格差に違憲判決を下す事を避けてきた最高裁判所の事なかれ裁判官を全部入れ替える事に国民が真剣に取り組むしかない。

山に対する思いを新たにしたものである。

『日本百名山』という本がある。作家の深田久弥さん（故人）が生涯の山登りの経験から、ある基準の下に一〇〇座選んだものである。私の愛読書の一つであり、山に導いてくれた指針書であって、転勤の度々に荷物の中に入れて持ち歩いたものであり、今でも書棚にあり、時に紐解くのである。大きな初版本（昭和三九年）と文庫本（新潮文庫）の同じものが二冊あり、赤い線などが入っていて、なつかしいものである。

入省（農林水産省）して食料庁に配属され（昭和四〇年）、通称「タコ部屋」で夜遅くまで米価の算定作業をしていたが、こんな生活のみを貴重な青年時代にしていいのかと思ひ、休みになるとその一つ一つを登り、赤丸をつけてゆくのが、独身の太

きな楽しみであった。その数は結婚するまでに五〇座になり、その後ペースはすっかり落ちたが、現在は七〇座になっている。もう登ることはないだろうから、三〇座は未踏のままということになる。それにしてもよく登ったものだと思ふ。

深田さんは、人間に人格があるように山には山格があつて、その要素は品格（その一つは高さ）、歴史、個性であると考え、一〇〇座を選んでゐる。そして名山としての実力を備えながら、世にあまり知られていない山や、正しい評価を受けていない山を発掘し、絶賛した名文で紹介している。

日本で第二位の高さと風格を備えながら、富士山の名声にかくれている北岳、北アルプスの通称銀座ルートから少し外れているため忘れられているが、そのことでかえつて荒されず輝いて見える黒部五郎岳、黒岳（水晶岳）、また南アルプス南部の鈍重なる山々（赤石岳、聖岳）、気品ある雨飾山等々を挙げている。

久し振りに北岳のさわりのところを開いて見ると、「清秀な高土のおもかげがある」と記されている。又、北岳は平家物語の海道下りの章に「北に遠ざかりて白き山あり」

として出てきて、「惜しからぬ命なれども今日までにつれなき甲斐の白峰を見つ」と歌われている。

深田さんは、書の中で山と文学の係わりについてこの北岳の他に、穂高と「氷壁」（井上靖）、早池峰と「遠野物語」（柳田国男）、岩木山と「津軽」（太宰治）……等々思いをこめて書いている。

山登りの大きな楽しみは、何と言っても山岳展望である。もう四十年以上も前になるが、北穂高から眺めた峰々の壮大さや、黒部五郎岳からみた飛騨の秀峰笠ヶ岳は絶品の感がしたが、今でもはつきりとその光景が思い描けるのは不思議なくらいである。徹夜して十三時間程歩いた鹿島槍ヶ岳への登山は、ある悩みをいだいての山行であった。北アルプスの薬師岳、黒岳、鷲羽岳等に囲まれた雲の平は、お花畑と池塘であ

ふれた素晴らしい草原であった。また訪れたいと思つていたが果せていない。

現役時代、国際交渉でしばしばスイスのジュネーブに行くことがあつた。一ヶ月程の長期出張の折は、休日を利用してマッターホルン、ユングフラウ、モンブラン等を訪ね歩き、日本の山とは違ったスケールの大きさを楽しんだものである。定年後妻とヨーロッパツアーに参加し、これらの山々をハイキングしたこともよい思い出であるが、それも、もう十年も経ってしまった。今は、山々の恵みによる温泉めぐりが夫婦の大きな楽しみとなっている。そして西穂高岳などロープウェイ等を利用してある高さまで行き周囲を眺めれば、そこには昔、懸命に登つた山々があり、若い頃の山行と重ね合わされたささやかな人生が、なつかしく回想されるのである。

自由執筆

前方後円墳の魅力

村上 邦治

日本古代史に興味を持つ者は、わが国独

特の古墳である前方後円墳を訪れることが多からう。しかし巨大古墳の大半は宮内庁が管理する天皇陵になっている為、塚の外から鬱蒼とした森や雑木林を眺め、何とか方と円の墓形が判別できる事で満足してきた。巨大さには驚かされるものの、古墳の

持つ埋葬や祭祀施設及び權威の象徴としての役割について、今一つ実感できないもどかしさを感じることが多かったのではなからうか。

昨年秋から国史跡に指定され、築造当時を復元されている地方首長の前方後円墳を三箇所訪れた。実際に古墳の上を歩いて、改めて前方後円墳を実感し、その魅力に惹かれることになった。

埋葬施設については安芸東広島市三ツ城古墳（全長九二m、後円部高さ一三m、五世紀前半築造）の後円部では、石を箱形に組んだ石棺の埋葬施設がガラス越しに確認できる。古墳は三段に積み上げられ、それぞれの壇には埴輪が立ち、斜面は葺石で覆われているので木立は一切無く、これまで見慣れた大古墳の風景とは一変する。

神戸市五色塚古墳（全長一九四m、後円部高さ一八m、四世紀後半築造）では、その大きさに驚くとともに、後円部からの眺望は対岸の淡路島まではつきり見渡すことができ、人々にこの地方首長の權威を見せ付けている。

四世紀後半から、くびれた所に造り出しが現れるが、これについては、伊勢松坂市

宝塚古墳（全長一一一m、後円部高さ一〇m、五世紀前半築造）の造り出し遺構を見るとそこで祭祀儀式が行われたことが解る。この周辺から埴輪が当時置かれたままの状態で見つかり、古墳儀式の一端が再現されている。これらの古墳では出土した埴輪についてレプリカながらもそのまま復元されているので、円筒形のものから家、花、動物などの精巧な形象埴輪に至るまで身近に観察できる。その中で宝塚出土の船形埴輪は全長一四二cm、高さ九二cmの大型埴輪で、大きさと共に船上に笠、仗、刀の飾りをつけたその豪華さは一見に値する。

しかし何といっても前方後円墳の最大の使命は「大勢の人に見せる」ことにあると

自由執筆

おわり名古屋追想

すもう・相撲・角力

(友の会) 諸橋 奏

社命で六年間、名古屋で生活をした。住居は国際的寺院覚王山日泰寺普門閣の脇で、毎早朝、読経の大斉唱で目醒めた。

思われる。宝塚は伊勢湾から、三ツ城は古代山陽道から多くの人が見たはずだ。五色塚は明石海峡を通る船を意識して丘陵斜面を利用して築造されている。中国や韓国からの使者にその威容を誇ったものと思われる。長期間形を保つ為に葺石で覆い、さらに縁には埴輪を並べ立てる事で華やかさを演出している。初期ヤマト政権が考案した方墳と円墳を合体させたその造形美には、古代日本人の美意識の高さを窺わせるものがある。

この度宮内庁は応神天皇陵への立ち入りを認めたことが報じられている。今後更に調査が拡大していけば、謎の多い古代史の解明が期待できる。

日泰寺は、明治三十一年（一八九八）英領インドで見えられた釈尊の御遺骨の一部と、黄金釈迦像を暹羅国王家より寄贈された日本仏教界が、十萬坪の敷地を用意して誘致した名古屋の地に、諸宗共同で、明治三十七年（一九〇四）創立、昭和十七年（一九四二）旧称日暹寺を日泰寺と改称した単立宗教法人の寺である。この日泰寺の建立を機に周辺に名刹が集まるようになった。宝亀

山相応寺も、元の東区山口町から移転してきた。相応寺は徳川家康の九男で尾張藩祖義直が、母相応院おかめの方の菩提のため、寛永二〇年(一六四三)建立した寺である。相応寺は、大相撲名古屋場所では九重部屋（宿舎になり、わが家からは数分の距離にあった。）であった。

ところで相撲について広辞苑は「すもうスマフ(相撲・角力)(動詞「すま(争)ふ」から。仮名遣スマフとも)……古代から宮廷で相撲の節として秋に行われた」と記す。スマイはスマウの連体形の名詞化。相撲のルーツは大陸にある。モンゴルでは日本という「モンゴル相撲」は「ブフ」と呼ばれ、伝統の国技で、その起源は紀元前まで遡れるという。

中国でも古い歴史がある。「礼記」(周の末から漢時代までの礼に関する記録集)に「天子……力を角（かく）わしむ」とあるとか。周の末といえは紀元前八世紀頃である。また『漢書』(九二年後漢の班固著)によれば、秦時代、相撲は角とか角觝（かくい）(抵)などと書かれ始めたという。

日本では「角觝」の字は『古事記』(七二二年)にみられるとのことであるが、周

知の物語は『日本書紀』(七二〇年)の記。

「垂仁天皇六」に

「當麻蹶速と野見宿禰とに搦力（なまひ）とらしむ」これが日本の相撲の発祥とされる。桜井市穴師の地でのことだ。

また「雄略天皇十四」には

「采女を喚（う）し集（あ）へて、……相撲（ま）らしむ」とある。垂仁天皇は四世紀、雄略天皇は五世紀頃の天皇とされる。

因みに「角」には「くらべる・あらしむ」

「撲」には「うつ・なぐる・うちたおす」の意味がある。角力と相撲のルーツは同一だろうか？

大相撲は江戸時代に始まるが、現在の大相撲興業は、財団法人日本相撲協会が主催している。協会設立は大正一四年(一九二五)で、その認可の行なうべき事業の一つに「相撲ヲ中心トスル体育ノ奨励指導」がある。

私は昭和二十年代、乳業会社に入社した。社は創立以来「食と健康への貢献」を使命としていた。当時国技の相撲は殆ど唯一の国民的スポーツで、体育と健康は密接な関係があった。そんな背景を引継ぎ、赴任した昭和六一年七月の名古屋場所から「L.L

(ロングライフ)牛乳」を九重部屋に提供することとした。時恰も元横綱北の富士親方率いる九重部屋の全盛時代で、六一年・六二年・六三年・平成元年と九重部屋横綱千代の富士が名古屋で連続優勝した。六三年は全勝優勝であった。加えて六二年には二度目の優勝を果した北勝海が横綱になり、部屋は二人横綱を擁するに至った。

巷で噂が流れ、九重部屋が強いのは、あの牛乳の験（あ）のせいということ、一度是非他の部屋へも提供して欲しいとの申し出が社内から出た。断る訳にもいかなかった。結果、平成二年名古屋場所の優勝は大島部屋の旭富士であった。あれから二十年、今も八角部屋の陣幕親方の名で毎場所新番付が送られてくる。律儀に脱帽。

【会員の活動】

▲鯨游海氏

「ニツキン」1月28日付記事

〈21世紀を救う儒の教え〉

▲小田絃一郎氏

〈源氏物語〉講座

大田区民大学 2月26日

相模大カルチャーセンター 2月〜7月